



# 第31回日本医療薬学会年会 メディカルセミナー21



2021年

10月10日(日) 11:10-12:10

WEB開催

学会がWEB開催となりましたので、LIVE配信にて実施をさせていただきます。  
詳細につきましては、学会ホームページ  
(<https://site2.convention.co.jp/31jsphcs/>)をご確認下さい。

## 抗がん剤の皮膚障害の マネジメント

座長

藤田 行代志 先生 (群馬県立がんセンター 薬剤部 薬剤課長)

『がんとともに生きる』を支える  
～アピアランスケアとの出会い～

演者

吉野 真樹 先生 (新潟県立がんセンター新潟病院 薬剤部 薬剤科長)

がん薬物療法で起こる  
皮膚障害に対する症状マネジメント  
～保湿とスキンケアの重要性～

演者

山崎 直也 先生 (国立がん研究センター中央病院 皮膚腫瘍科 科長)

## 抗がん剤の皮膚障害のマネジメント

### 『がんとともに生きる』を支える ～アピアランスケアとの出会い～

吉野 真樹 新潟県立がんセンター新潟病院 薬剤部 薬剤科長

旧来、がん患者が苦痛と感じる主な症状として悪心・嘔吐などが首位を占めていたが、近年の支持療法の発展に伴い大きな変遷を遂げた。一方で、脱毛や皮膚症状などの諸症状については解消が乏しく、がん治療に伴うサポーターケアの一環としてアピアランス(外見)ケアの重要性も高まってきた。これら外見の変化は生命に直結しないため、医療者には見過ごされやすく、かつ患者もあまり相談しないことが多いとされ、結果として心理的・社会的な孤立を招くといった負のスパイラルをもたらす。アピアランスケアとは、国立がん研究センター中央病院外見関連患者支援チーム(現アピアランス支援センター)が作成した言葉で、がん治療による外見の変化に対し医療者が行うケアとされている。自分らしく生きられるよう、外見とともに周りの環境や患者本人の気持ちを整え、サポートすることを目的としており、皮膚症状マネジメントなどを通して薬剤師にも参画の機会が多いものとする。

母の乳がんが発覚したのは2013年のことであった。いろいろなストレスがあったのだろう、自身も円形脱毛症となり日常整容に悪戦苦闘したことを覚えている。当時、まだアピアランスケアの存在を知らなかったため、対処技術も十分ではなく、情報収集においても大変に苦労した。しかしながら、家族として、医療者として、そして薬剤師として、母のがん治療と向き合い培われたものは、おそらくアピアランスケアの精神に近いものであったのではないかと感じている。

アピアランスケアについては勉強中であり、皆様に自信をもって情報提供できるようなスキルは持ち合わせていない。本講演では、母のがん治療に同席した経験に基づくところを紹介させていただきつつ、アピアランスケアの本質に触れることができれば幸いである。「がんとともに生きる」を支えるアピアランスケアの存在をより多くの先生方に知っていただき、薬剤師としてはどういったアプローチができるのか?を皆様と共有したい。

### がん薬物療法で起こる皮膚障害に対する症状マネジメント ～保湿とスキンケアの重要性～

山崎 直也 国立がん研究センター中央病院 皮膚腫瘍科 科長

がん薬物療法施行時には、しばしば皮膚障害が発現するが、これらの管理はがん治療成功の伴となる。以前からEGFR阻害薬によるざ瘡様皮疹、皮膚乾燥および亀裂、多発する爪囲炎やマルチキナーゼ阻害薬によって起こる殺細胞性抗がん薬のものとは異なる手足症候群は、その代表的なものであった。更に、近年は抗PD-1抗体、抗PD-L1抗体、抗CTLA-4抗体といった免疫チェックポイント阻害薬の投与で生じる多彩な自己免疫関連の副作用においても皮膚障害は早期に起こる注意すべき症状として知られている。現在はこれらの多様な作用機序の抗がん薬が単剤投与されることは勿論、臨床効果の向上を目指して多くの併用療法が導入されており、その中には皮膚障害の重症度と治療効果に正の相関関係が認められる薬剤もあることから、主治医がひとりでカバーできる診療の範囲を大きく超えており、皮膚障害管理におけるチーム医療の重要性が増している。がん薬物療法に伴う皮膚障害に対する有効な治療法のエビデンスは未だ十分でないが、一方で保湿剤を用いた皮膚障害の予防には幾つかのエビデンスが知られており、保湿を含めたスキンケアの励行は安全にがん薬物療法を行う上で必須となっている。今回は、上記のような種々のがん薬物療法で発現しやすい皮膚障害の症状や特徴とそれらに対する具体的な対策について述べるとともに、特に保湿剤の剤形選択についても言及を試みる。